

# ぼくが宮沢賢治だったとき

たくき よしみつ  
鐸木能光

夜九時台に家でテレビを見ることなどほとんどない僕が、その夜、たまたま『お宝拝見』という番組を見ることになったきつかけは、小さな地震だった。

震度二か三程度の、どうということのない地震で、揺れていた時間もごく短かったが、なんとなく気になってテレビのスイッチを入れたのだった。

画面には速報はまだ入っていないかった。リモコンでチャンネルを切り替えているとき、聞き覚えのある音が耳に飛び込んできた。ジャン。

文字で表せば、せいぜいこんなものだ。場面転換のきつかけなどに使う効果音<sup>\*1</sup>。バラフォンという民族楽器の音源が混じっているのが特徴的なのだが、それを聞き分けられる人間はそうそういないだろう。

「では、登場いただきましょう。××市からお越しの山谷さんです。あなたのお宝、ハイケンッ！」

司会役はMANZAIブームのときに売り出した大阪出身の漫才コンビの片割れ。相方はその後まったく見かけなくなってしまう

\*1 このCD-ROMに収録した「サロベツに行く」という曲でも使っています。

ったが、どうしているのだろうか。

カーテンが開いて、白髪の紳士が布をかけた四角い物と共に登場した。

「ジャジャン♪」

今度は少し長めの効果音。

僕は地震のことなどすっかり忘れて、その番組を見始めていた。番組の内容が面白そうだったからというわけではない。自分が作った音が、どんな番組で使われているのだろうかという興味からだった。

さつきから流れている「ジャン」や「ジャジャン」は、僕が数カ月前に作った「作品」だったのだ。

JASRAC（日本音楽著作権協会）を通さない、フリー音源CDというのがある。

そこに収められている作品は、著作者や出版元に断ることなく商業使用してもいいというCDだ。番組やイベントのBGMや効果音に使いやすいような音楽作品がいくつも収められていて、一枚数万円で販売される。

そのCDからのコピー再配布は不可だが、買い求めた一事業者がCDから直接利用する限り、自由に使用できる。

僕はそのCDに十曲の音楽と二十種のごく短い音楽効果音を提供していた。

ギャラは確か、音楽作品は一曲三万円、音楽効果音は一点三万円だった。全部で三十六万円。源泉徴収されて振込額は三十二万四千元。

作品はすべて、テープに録音した「完成品」（業界では「カンパケ」と呼ぶ）として提出する。演奏料も録音料もテープ代も出ないから、当然、作曲・編曲・演奏・録音のすべてを自分一人でこなさなければ商売にはならない。あまり時間をかけても馬鹿ら

しいので、少なくとも一日五曲のペースでこなす。あのときは確か全部で三日くらいの仕事だった。

困るのは、やっつけていたままたま「いい作品」ができてしまったときだ。

そういうことはよくある。

著作権使用料が入らないゴミのような仕事だから、適当に手を抜きたいとは思うのだが、そう思ってからリラックスすると、意外にいいメロディーが浮かんだりしてしまう。すると、できあがってから、はたしてこれを三万円で売り飛ばしていいものかどうか迷うのだ。

わざと質を落として録音し直したこともあった。しかし、手元に残った「いい作品」が、その後、一人前の作品として世に出ていくチャンスはほとんどない。結局テープの中に収められたまま、僕の仕事部屋のラックの中で永い眠りにつくことになる。

埋もれてしまうならば、三万円で売り飛ばしても、どこかで何らかの形で使われたほうが作品も幸せかもしれないと思ったりもするのだが、その判断がとても難しい。

「ジャンジャジャーン♪」

「え？ 高額評価が出ましたか？ 本人評価額は百万円ですが、果たしてこの一見不細工な風景画に一体なんぼの値が付いたんでしょう？」

僕が作った効果音に乗せて、司会者が関西弁と東京弁が混じった奇妙な言葉で叫んだ。

画面では、小さな風景画が中央のテーブルの上に載せられている。

説明では、村山槐多かいたが東京で苦学生をしていた頃、ときどき食事をさせてくれた近所のおばさんにお礼として持ってきた風景画だという。そのおばさんというのが、この絵を番組に持ち込んで

きた地方都市の市会議員の母親で、母親の形見としてその市会議員が受け継いだそうだ。

スタジオの電光掲示板に、一の位からゼロが次々に並んでいく。「ジャジャーン♪」

僕が作った効果音とともに、電光掲示板には3のあとに0が七つ並んだ。

「ええー！ 三千万？ ほんまでっか、これ？」

司会者がほとんど絶叫に近い声を出す。

鑑定士たちの席も、さつきから何やら色めき立っている。

やがて、興奮に包まれたスタジオの空気が伝わる中、絵画専門の鑑定士が説明を始めた。

「驚きました。どうやら本物の村山槐多ですね。槐多の残した絵というのは、そもそも非常に少ないんです。村山槐多は二十三歳の若さで亡くなっていますから。」

三千万というのは、もしこれがオークションに出された場合、最低でもこのくらいの値段から競られるだろうということ、実際には億の単位になるかもしれません。バブルの頃なら間違いない億の値がついたでしょうね」

「槐多が描いた絵が三千万？ 買いたくても買えまへんなあ、これは」

司会者がとんでもない駄洒落を飛ばした。ほとんど喋らないアシスタントの若い女が、弾けるような仕草で笑ったが、鑑定を依頼した市会議員の表情は逆にこわばっていた。

見ていた僕は思った。自分が描いた絵に、その後、億単位の値段がつけられて売買されることを知らずに死んでいった村山槐多と、とりあえずは一曲三万円で曲を売って生活の足しにできる自分とでは、一体どちらが幸福なのだろうか。

画面の上に、ようやくテロップが出た。

〔地震情報。先ほど地震がありました。各地の震度は次の通りです……〕

## ／＼

僕はもうすぐ四十歳になる。

職業は作曲家。

といつても、CM音楽や学習教材、テレビゲーム、イベントのBGM用などに曲を売り飛ばしている無名の作曲家だ。実績がないので、JASRACの会員にもなれない

実際には、不況になってからは作曲の仕事は年に何回もないのだが、面倒なので各種書類の職業欄には「作曲家」と書き込むことにしている。

多摩ニュータウンの外れに近い賃貸アパートの一室に、猫二匹と共に暮らしている。

四畳半の仕事部屋には、録音機材と楽器が所狭しと並べられている。

押入を改造した仕事机の真ん中には、マッキントッシュ・カラークラシック、机の隣には七十六鍵の古いデジタルピアノが置かれている。

この狭いL字型のコナーで、僕はほとんどの仕事をこなす。マックはMIDIボードを介して部屋中の電子楽器にケーブルで結ばれている。また、モデムを通して電話回線にもつながっていて、いつでも大手パソコン通信ネットのSelfyServeにアクセスすることができる。

作曲の仕事が減った分、最近パソコン関係の原稿書きの仕事が増えている。

金がないので新しい機種は買えないが、編集部を持ち込まれるデモ機を預かってテストすることなどもよくあるので、知識はあ

る。簡単なプログラムも組める。

また、電子楽器とコンピュータの自動演奏ソフトを使った音楽制作（業界では「打ち込み」という。生の演奏ではなく、演奏をデータ化してコンピューターに打ち込むところからこう呼ばれている）の分野でも、ある程度の知識があるので、音楽雑誌に記事を書くこともある。

しかし、僕としては、そうした仕事にはもちろん満足していない。

自分は作曲家なのだという気持ちが捨てきれないのだ。

パソコン通信の大手・Selfyには、会員が自分の自己紹介を登録する機能がある。登録すると、他の会員の誰もが、ID番号からその人のプロフィールを検索することができる。

そこに、僕はこんな自己紹介文を書いたことがある。

「本名：ステファン・ショウ・ライヒ。

一九四〇年、ストックホルムで生まれる。現在五十四歳。父親はスウェーデン人、母親は日本人。父親の仕事の関係で、少年期はイギリスで過ごす。十八で渡米し、バークレイ音楽院でジャズを学ぶ。

現在はニューヨークでジャズギタリスト・作曲家として活動中。ライブハウスでの演奏の他、インディーズ・レーベルのプロデューサーも務める。

Selfyへは、国際ネットのインターサブ経由でお邪魔しています。よろしく。」

それは僕にとっては、一種の理想の人生だった。

ちようど音楽関係の仕事が立て続けにうまくいかなくなり、精神的にまいっていた時期だったこともあり、こんなでたらめを書

き込んで気晴らしをしてみたのだ。

しかし、このプロフィールのことは、書き込んだまま、長いこと忘れてしまっていた。

パソコン雑誌の仕事は、依頼から原稿渡しまでほとんど電子メールを使うので、Selfyには毎日アクセスするが、ネット内の同人的活動の単位である「フォーラム」で発言することなどはまずない。知ったかぶりで自己顕示欲の強い連中と何かの拍子に論争でも始めてしまったらエネルギーの浪費だ。気が向くと書き込まれている公開メッセージを読むことはあったが、自分から何かを発言することはない。こういう「読む」だけの会員を、パソコン通信用語ではROMという。READ ONLY MEMBERの略らしい。

そんなわけで、誰も僕のこのでたらめのプロフィールを参照するはずはなかった。読まれることがないと分かっていたので、あんなでたらめも書けたのだろう。

しかし、ある日、予想もしなかった電子メールが届いた。

「はじめまして。ゴーシュこと瀧本賢治といます。

ステファンさんが電子音楽フォーラムのデータライブラリに登録されているフリーソフト、『ドクター・キーぼー』を愛用させていただいています。KB30は古いシーケンサーで、発売中止になってからもうだいぶ経ちますが、ぼくはある理由から、今でもこれを使って作曲しています。

どんなかたがこのソフトを作ってくださいただらうと興味があり、IDからプロフィールを読ませていただきました。

ニューヨークでご活躍中のギタリスト・作曲家ということですが、もしよろしければ、ぼくの作った曲を聴いていただけないでしょうか。プロの音楽家のかたに、ぜひ聴いて、批評していただ

きたいのです。

ずうずうしいお願いだとは重々承知してはいますが、どうぞよろしくお願いいたします」

文面からすると、まだ若そうだった。二十代前半、あるいはまだ十代かもしれない。

僕はその発信人のIDから、彼のプロフィールを検索してみた。しかし、画面には「この利用者のプロフィールは登録されていません」と表示されただけだった。

Selfyにはいくつもの同人的集まり「フォーラム」があり、その中のデータライブラリには、会員が作ったパソコンのソフトや作品が登録されている。その中の多くは「フリーソフト」といって、会員が自由に自分のパソコンに取り込み、無料で使用できるようになっている。

「ドクター・キーぼー」は僕が制作して電子音楽フォーラムに登録しておいたフリーソフトだが、もう何年も前のことで、すっかり忘れていた。

それにしても、やっかいなことになった。

あのでたらめなプロフィールを登録した直後ならば、それなりに「ニューヨーク在住のギタリスト、ステファン・シヨウ・ライヒ」を演じる気力もあったのだろうが、数年経ってしまった今では、もうそんなつもりはない。

しかし、この瀧本という青年（「おじさん」だとは思えなかった）に、いや、あれはでたらめで、実は自分は純粋な日本人で、多摩に住んでいる中途半端な音楽職人なのだと告白するのも嫌だった。

結局、僕はこんな返事を電子メールで送った。



「メール、ありがとうございます。『ドクター・キーボード』などという言葉が出てきて驚きました。あれは確か、KB30の入力操作をパソコンのキーボード上から行えるという一種の信号変換ソフトでしたよね。大昔に気紛れで作って、Selfyの電子音楽フォーラムのデータライブラリに登録しておいたものですが、そんなことすっかり忘れていました。あれを使ってくれた人がいたというのもびっくりです。

KB30というシーケンサーは操作ボタンがとても小さくて押しにくいので、パソコンのキーボードから入力できないだろうかという発想で作ったものです。でも、あのとときでさえすでにKB30は時代遅れで機能も少ないシーケンサーでしたし、その後すぐに新機種にとって代わられましたから、あの『ドクター・キーボード』も意味を持たなくなっていました。そもそも、パソコン用に優秀なシーケンス・ソフトがたくさん出ていますから、何もわざわざパソコンのキーボードを使って旧式で低機能の単体シーケンサーを動かす意味などないのですよね。馬鹿なものを作ってしまったものです。私自身、KB30はとっくの昔にお払い箱にしてしまいました。瀧本さんって物持ちがいいんですね。

ところで、あなたの音楽を批評するという件ですが、私には少し荷が重く、戸惑っています。

音楽というのは、完全に感性の産物ですから、それをどう評価するかというのは人それぞれですし、絶対的な評価というものもありません。だとすると、せいぜい「私はこの音楽が好きだ」

「嫌いだ」「何も感じない」「心を揺さぶられる」というような主観的な感想しか述べられないわけですが、それでもいいとおっしゃるならば、喜んで拝聴させていただきます。でも、あまり期待しないでくださいね。

テープを送っていただく場合、ニューヨークへ直接送っていた

だくと送料もかかりますし、手間も大変です。ですから、日本の私の実家あてに送ってください。家族が私へ転送してくれるはず。住所は以下の通りです。……」

僕は自分の住所を「日本にいる家族の住所」と偽って教えた。

次の日、僕が愛用のマッキントッシュをSallyに接続すると、〈ゴーシュ〉氏からの電子メールが二通届いていた。一つは普通のテキストファイル（文書形式）だが、もう一つはバイナリ（プログラム形式）のものだった。

直接読めるテキスト形式の電子メールのほうをまず読んだ。

「ステファンさん、ごていねいなお返事をいただきありがとうございます。ございました。」

音楽は感性の産物だというお話、確かにその通りだとは思いますが、ぼくは加えて、こんなふうに感じています。少し長くなりますが、ぼくにとっての音楽について、書いてみます。ご迷惑でしようが、おつきあい願えれば幸いです。

ぼくにとって、音楽は言葉などよりもずっと魅力のある不思議な波長です。もし神様か悪魔に、「言葉のない世界と音楽のない世界のどちらかを選べ」と言われたら、今のぼくはまちがいに言葉のない世界を選ぶでしょう。なぜなら、言葉がどうしても埋められないもの、言葉では伝えられない何かを、音楽は満たし、伝えてくれる可能性を秘めていると思うからです。

これはぼくの勝手な思い込みですが、その「言葉が埋められないもの」を、今の人間はまだきちんと自覚できないでいて、遠い将来、それに気づくような気がするのです。まだ言語を持たなか

った太古の人類が、自分たちがその後、言語によって築いていく精神世界の無限の広がり気づかずに、ただ、「あー」とか「うー」とか唸っていたときのよう。

科学や技術なども、言葉がなければ生まれませんでした。その意味で、現代文明は言葉が築き上げた文明です。でも、人間の築いた文明社会は、このままでは破滅へと向かうでしょう。それを言葉だけで解決できるとは、ぼくにはどうしても思えないんです。もちろん言葉は必須でしょうが、もっと他に、まったく違う次元の何かがまだ残されているような気がするのです。その未知の領域を開く鍵が、音楽なのではないか……そんな気がしているんです。妄想だと笑われるでしょうが、そうした思いは日々強くなっています。

みんなが次第にそのことに気づいていけば、人間はこの世界に今とは違った文明を作り上げることができるかもしれない。そしてそのとき、音楽は今のようになんか単なる娯楽、あるいは芸術というだけではなく、もっとずっと大きな意味を持つてくるでしょう。例えば、クジラと心を通わせ合う重要な手段としての音楽……というような。

でも、ぼくのそうした夢をあざ笑うかのように、今のところ、巷に流れる音楽はほとんど下品になっていくようです。世の中の音楽が下品になると、人間の将来も暗くなる気がして悲しくなります。

あ、一足飛びに「下品な音楽」などという言い方をしてしまいました。すみません。説明が必要ですね。言葉ではうまく言えないんですが、例えば、メロディーやハーモニーの美しさをないがしろにすること。生の音、自然の音の美しさを大切にせず、エレクトロニクスに頼りきった刺激的表現にことさら浸りきることに。心の中から湧き出てくる音楽を見つめずに、目の前の機械をいじ

って強引に音楽の形をしたものをでっちあげること。……そういうのって、みんな下品だと思います。

ぼくはコンピュータを使って作曲していますが、それはぼくの心の底から湧き出る音楽を書き留めておくための手段にすぎません。本当は本物の楽器や生の声で演奏され、歌われてほしいんです。でも、最初からそれを望んでも実現できないので、やむを得ずコンピュータを使っています。

すみません。重苦しい話をしてしまいました。取り急ぎ、いちばん自信のある曲を、簡単なMIDI標準形式のファイルにして送りました。聴いていただければ幸いです。

ぼくにはあまり時間がないんです。せつかちなやつだと思われるでしょうが、どうぞお許してください。

「ゴージュ」

そのいささか宗教じみた内容に、僕の気持ちはいつぺんに重くなってしまうた。

これでは、彼の作品に対してとても下手なことなど言えない。少しでもケチをつければ、それこそ一生恨まれてしまうかもしれないではないか。

それでも、送られてきたバイナリの電子メールをマッキントッシュにダウンロードして、その演奏データを再生させてみた。

MIDIの標準形式ファイルというのは、どんな自動演奏ソフトでもカバーしている最もオーソドックスな演奏データ形式なので、パソコンの機種や搭載している音源ボードの種類を問わず、大体、作者の意図したとおりの音を再現してくれる。

スピーカーから流れてきたのは、ハーモニカに似た音色だった。そのシンプルな音色が、哀愁を帯びたメロディーを綴っていく。

伴奏はほとんどない。

素人臭さ丸出しの演奏データだったが、八小節もいかないうちに、僕は思わず身体をこわばらせた。

美しいだけではない。哀切なだけではない。輝いているだけでもない。

理屈抜きに、心を揺さぶられるメロディーだった。

こういう感慨を持てるメロディーに出逢ったことは、そう多くはない。ほとんど数えられるほどだ。すぐに思い出せる範囲では、『上を向いて歩こう』や『グリーン・スリーブズ』あたりだろうか。今流れているのは、そのレベルの、極めて上質なメロディーだった。

僕はその演奏データをリピート再生にし、何度も繰り返して聴いた。

もしかして何か有名な曲だったのではないかと疑ってもみた。メロディーというのはたった十二音の音の組み合わせにすぎない。だから、いいメロディーはもうほとんど出尽くしているのだと言う者もいる。その意味で、これだけのメロディーがまだ発見されずに残っていたなんて信じられなかったのだ。

しかし、どこかで聴いたメロディーではない。やはり、今、初めて聴くものだ。それなのに、エバーグリーンを聴いているような安心感に包まれる。

本当かよ……おい。

僕は愕然として、心の中で呟いた。

「ゴージュ様、

送っていただいたMIDIファイルを再生してみました。

驚きました。

正直な話、私は全然期待していなかったのです。世の中に、

「いい曲」なんて、そうそうはないものです。埋もれている名曲というのはたくさんあるとは思いますが、その中の一つがこんな形で私の元に届くなどとは想像もしませんでした。

あの曲は間違はなく傑作です。私個人が好きだということではなく、いわゆるエバーグリーンとして歴史に残る名曲になる可能性を秘めたものだと思えます。

他の作品もぜひ聴かせてください。また、これらをどうやったらきちんと世の中に出していけるか、一緒に考えていきましょう」

僕は悩んだ末に、こんな返事を電子メールで送った。

ゴーシュの作品を世に出すべきだということは、本気で思っていた。しかし、それを手伝うといっても、ニューヨーク在住のギタリスト・作曲家というプロフィールが嘘だということを告白しないまま、何かを手伝うことなどできるだろうか。

馬鹿な思いつきで嘘のプロフィールを書き込んだことをますます後悔したが、今さらどうなるものでもない。なるようになれだ。これから先、自分の正体がばれてしまう懸念よりも、彼の他の作品を早く聴いてみたいという欲求のほうがずっと強かった。

しかし、すぐに来ると思った返事はなかなか来なかった。

一週間しても、ゴーシュこと、瀧本賢治からの返事はなかった。もしかしたら、こちらの正体がばれたのだろうか。

不安と焦燥の中で、僕はさらに電子メールを送った。

「ご返事がないので心配しています。旅行に出ているとか、仕事に忙しいというようなことならいいのですが。」

あまり時間がないと言っていましたね。あの一言が妙に気になります。お忙しいのかもしれませんが、ご一報ください」

しかし、やはり返事はなかった。

怪しげなやつに、これ以上自分の傑作を聴かせて、盗まれてもしたら損だとでも思い直したのだろうか。

過去の非行歴がばれて恋人に振られた男のような心境で、僕はさらに待ち続けた。

## ／＼

連絡が途絶えて一か月後、待ちに待った〈ゴーシュ〉からの電子メールが届いた。

かなりの長文だった。

「Selfyネットワークには、電子メールの送信期日指定という機能があります。ご存じとは思いますが、これは、電子メールをいったんホストコンピュータが受け取った後、指定された期日に相手に送信するというもので、最大、一か月後までの日時が指定できます。

この電子メールは、その機能によって送信されたものです。つまりこの文章は、ステファンさんが今読んでいる時点よりも最低一か月以上前に書かれたものです。

ステファンさん、まずぼくが今置かれている状況を簡単に説明します。

ぼくはALSという病気に侵されています。神経のニューロンが変成する原因不明の病気で、現代の医学では決定的な治療法がありません。宇宙論で有名なホーキング博士と同じ病気と言えれば分かっていただけたと思います。

ぼくは今、十九歳です。若くして発病したので（この病気が若年で発症することは珍しいのですが）、ぼくにはあまり友達がい

ません。両親は亡くなり、今は祖母と二人暮らしです。他に身寄りはいません。病気はどんどん進行し、今では立ち上がることもできず、声も出せません。辛うじて、こうしてあごの先に特殊な装具を着けてパソコンのキーボードを叩けるだけです。

祖母をはじめボランティアの方々の手厚い看護をしていただきますが、ぼくにとつていちばん大切な音楽の話をする相手がないことが苦痛でした。

ぼくの手元には旧式のシーケンサーKB30と、やはり旧式のパソコンが一台あります。作曲したものを、この二つの機械を使って記録しています。ステファンさんが作ってくださいった『ドクターキーボー』は、指先がうまく動かせないぼくにとつてはまさに救世主でした。あごの先でパソコンのキーボードは時間をかければなんとか打てても、KB30の小さな操作ボタンはとても押せないからです。かといって、新たな機械を買う経済的余裕、時間的余裕は、ぼくにはもう残されていません。病状はどんどん悪化し、もうすぐ強制的に入院させられそうだからです。そうなるともう、パソコンに触れることもできずに、死を待つしかありません。

ぼくは、死そのものは怖くはないのです。人間はみんないつかは死にます。ただ、死ぬまでに、どうしてもやり遂げたいことがあります。それはこの世に音楽の作品を残すことです。

こんなことを言うと正気ではないと思われるかもしれませんが、人間は何度か生まれ変わるもののようにです。普通は生きている間は前世の記憶はよみがえらないものですが、ぼくは物心ついた頃からこの病気に苦しめ続けられたせい、あるとき、自分の前世がはつきりと見えました。

実は、ぼくは以前、宮沢賢治だったことがあります。

ぼくが宮沢賢治だったとき、神様はぼくにまず言葉を紡ぐこと



を教えてくださいました。しかし、言葉を紡ぎながらも、ぼくはある頃から音楽に非常に惹かれていきました。セロやオルガンを夢中になつて練習したこともあります。

でも、人間、一生のうちでそんなに多くのことはできないんです。いくつか作曲もしましたが、満足できる内容のものではありませんでした。それに、言葉を紡ぐ作業のほうさえ、きちんと完成できないままだったので、それ以上に音楽にまで手を広げるといふのはやはり無謀なことだったと思います。

一回の人生つて、本当に短すぎますね。ぼくが宮沢賢治だったときも、言葉を紡ぐ作業をつきつめることができないまま、死んでしまいました。

ぼくが宮沢賢治だったとき、ぼくは自分の書いた作品が多くの人々に読まれるかどうか、見届けられないまま死ななければなりませんでした。活字にできた作品集は一冊だけでしたし、自分の書いた文章で原稿料というものをいただいたことは一度しかありません。

今の人生、つまり、ぼくが瀧本賢治でいる現在において、自分がかつて宮沢賢治だったことを思い出したのは、きつと、その無念を神様が不憫に思ってくださいだからだろうと思います。宮沢賢治だったぼくは、『セロ弾きのゴーシュ』も『銀河鉄道の夜』も、活字になるのを見届けないまま死にましたが、代わりに瀧本賢治である現在のぼくが、それらの作品が今では世界中の多くの人々に読まれているのをしつかりと見届けています。こんな幸せなことはありません。この幸せに比べれば、ぼくの病気のことなど、取るに足りぬ不幸といえます。

でも、今この人生において、ぼくはどうしても、宮沢賢治だったときのぼくが成し遂げられなかったことをしてから死にたいのです。自分が納得できる音楽を残すこと。一曲でも二曲でもいい。

素晴らしいメロディーをこの世に残すこと。

それが本当に名曲だったのか、あるいは人から愛されるメロディーになるのか見届けられなくても構いません。残すだけで十分なんです。

祖母は音楽のことは分かりません。もちろんコンピューターのことともパソコン通信のこととも分かりません。まわりに、ぼくの作品を託せる適当な人は見あたりません。

ステファンさん、どうかぼくの音楽を預かってください。

ぼくはこれから毎日、この電子メールを一か月後に送信されるよう期日指定でセットし続けます。つまり、この電子メールがお手元に届くということは、ぼくがパソコンに触れられない状態になつて一か月が経過したということです。今ぼくは入院して意識不明かもしれないし、もう死んでしまっているかもしれない。ステファンさん、どうぞよろしくお願いいたします。

「ゴージュ」

それが「ゴージュ」からの最後の電子メールになった。

僕はSelfyの会員情報検索で、瀧本賢治のデータを調べたが「公開されていません」というメッセージが出るばかりだった。Selfyの本部にも電話をして、ゴージュのIDを告げて連絡先を教えてくださいと頼んだが、「会員の住所などをお教えすることはできません」の一点張りだった。

結局、僕の手元には、ゴージュからの何通かの電子メールのファイルと、一曲の名曲のデータファイルが残った。

僕は今、思索している。

この題名もつけられていない名曲をどうするべきかと。

宮沢賢治だったことのない、そして今後も宮沢賢治になれそう

もない僕には、やはり荷が重すぎる。

(了)

(初出「青春と読書」95年1月号)